Column

越境児童とふたつの都市の物語

「THE CROSSING」は、中国大陸で製作された広東語映画である。中国大陸では「普通話」と呼ばれる中国語標準語が共通語であり、方言地域では「請講普通話」（「標準語を話してください」）と地方文化への風当たりがつよい。そのような状況の中で、広東語の使用頻度が9割近いと思わせる本作品を作ったことに、監督・白雪の本作品へのこだわりを感じる。白雪は6歳の時に、両親に連れられて深圳に行き、深圳で成長期を過ごした。

本作品は主人公ペイの青春物語であり、同時に香港と深圳の二都物語でもある。ペイは「越境児童」である。越境児童とは香港の永住権を持ち、深圳に住み、香港の学校に毎日通う子どもを指す。香港教育の統計によれば、現在、2万5000人以上の越境児童が存在し、幼稚園から高校まで通う。

越境児童は1990年代、香港と中国大陸との経済関係が深まる中で誕生した。当時は中国大陸で働く香港人の子どもが主体であった。1978年、中国は改革・開放政策へと本格的に舵を切り、1980年に深圳が経済特区となった。1985年には広東省の珠江デルタが開放され、香港の製造業は続々と中国大陸へと生産拠点を移していた。

2006年に深圳市は外地児童が深圳で義務教育を受けるための条件を厳格化した。2008年にはリーマンショックで深圳の香港系企業が相次いで倒産し、香港からの進出企業関係者は家族とともに香港にもどった。

かわりに越境児童の主役となったのは「双非児童」であった。彼らの両親はともに香港永住権を持たない。2001年、香港の終審裁判所（最高裁）が双非児童である莊豊源に香港永住権を認めた。その後、2003年に自由行が始まると、香港で出産する中国大陸の女性が増えた。香港で生まれた双非児童は香港永住権を持ち、自らの権利として香港で教育を受けられる。両親も子どもにより大きな可能性を与えるべく、香港への越境通学を選択した。香港と深圳が隣り合わせだとは言え、出入境の手続きがあるので、実際に越境児童が通うのは、新界北部の上水、元朗、屯門に集中した。このため、当該地区では、両親ともに香港人であっても、地元の学校に通えず、遠距離通学を強いられるケースが出た。香港社会の反発は強く、双非夫婦の香港出産は2011年から受け入れ中止となった。

さて、主人公のペイは「父が香港人で、母が大陸人」であり、両親の片方が香港永住権を持つ「単非児童」である。ペイ本人が「母と深圳で暮らし、香港の学校に通う」という設定は、日本では「ペイの両親は離婚した」と想像されるのではないか。確かに、父親であるヨンが別の家族と幸せそうに食事をするシーンがあり、母親であるランも、ペイに「再婚」を匂わせる。しかし、母のファッションと日常、さらに終盤の親友ジョーの「あんたも母親と同じ売女だ」というセリフからわかるように、ペイの両親は法的に結婚していない。

1990年代、香港と中国大陸との経済関係が密になる中で、香港人男性が中国大陸で「包二奶」（愛人を囲う）しはじめた。その当時、香港の方が深圳よりも一人当たりの所得は断然高かった。ペイの父親は運送業に従事し日常的にトラックで香港と深圳を往復した。その時、深圳に出稼ぎに来ていたランと出会った。返還前後の段階では深圳もまだ不動産が安く、ヨンもマンションを購入してランを住まわせることができたのであろう。

隣り合わせでありながら、香港と深圳の間は「越境」せざるを得ず、越境すると世界が変わるのはなぜか。それは香港が英領植民地という歴史を有し、返還後は「一国二制度」が施行されているからにほかならない。香港は中国大陸とは異なる独立した法体系を持ち、香港ドルを使い、公用語は中国語（中文）と英語である。

本作品で取り上げたiPhone6の密輸も、香港と深圳が別々の体系に属することに起因する。2014年当時、Apple社はiPhoneの最新モデルが発表されても、中国ではすぐに販売しなかった。香港のiPhone価格は関税の関係で割安であった。最新モデルが中国大陸で発売されるまでの間、香港で購入したiPhone6を中国大陸に運び込めば、利ザヤを稼げた。

最後に、本作品の最後に、ペイが母のランを連れて香港を訪れるシーンに、わたしは深圳と香港との関係性の変化を感じる。もはやランは深圳で待つだけの存在ではない。深圳は人口30万人の小都市から、ファーウェイ（華為）やシャープを買収した鴻海が根拠地を置く世界有数のPC・携帯電話生産基地と成長した。一方、香港と中国大陸との「距離」は狭まりつつある。2018年秋には高速鉄道が香港まで延伸し、世界最長の海上橋で香港とマカオ、珠海が結ばれた。

2020年6月末の香港版国家安全法成立をめぐって、香港の一国二制度については国外では否定的な論調が多い。その中で、本作品は香港とマカオ、広東省との融合を目指す「大湾区構想」に関わる深圳という地域の主体性に気づかせてくれた。香港の今後を考える上で本作品は興味深い。

谷垣真理子（東京大学教授）

東京大学大学院総合文化研究科教授。博士（学術）。現代香港論、華南研究。大分県生まれ。香港大学アジア研究センターに留学。「変容する華南と華人ネットワーク」で第4回（2014年度）地域研究コンソーシアム賞研究企画賞受賞。